明石の史跡（９３）秀吉ゆかりの杉―十輪寺

明石川の河口部より数えて三つ目（鉄道の橋梁は除外）の橋が嘉永橋である。もと永久橋とよばれていたこの橋は、文化８年（１８１１）、町民による修理架橋がなったものでむろんそれ以前からも、この橋は、存在していた。架橋から４３年後の安政元年（１８５４）、うちつづく地震により破壊されたという（『新明石の史跡』１５０頁）。

安政元年（１８５４）１１月４日、いわゆる「安政東海地震」（Ｍ８．４）である。関東から畿内にかけて被害が及ぶ。ところがその３２時間後（１１月５日）、またもや大地震（Ｍ８．４）が発生。中部から九州にかけて、甚大な被害をもたらした。嘉永橋の倒壊はこれら地震によるものである（『理科年表』７１７頁）。

この橋を東から渡り終えた地点から、西へ１５０メートルの所に、十輪寺（真言宗＝西新町１丁目）がある。残念ながら、昭和２０年７月７日の明石空襲により、現在の姿になったという。門を入ってすぐの左側に、焼け焦げた「秀吉ゆかりの杉」の一部が現存する。もとは、高さ２５メートルの大杉であった。寺伝では、秀吉が三木攻城時に、戦勝祈願にもとづく植樹という（『明石の寺宝』５６頁）。秀吉とこの大杉を結びつけたものはなにか。その糸口は、寺の前を通過する道である。

周知のように、十輪寺門前の道は、旧山陽道である。天正１０年６月３日、備中高松の陣中にて、信長の訃報に接した秀吉は、毛利との和議をまとめるや、ただちに姫路に引き返すのが６日。いわゆる中国大返しである。９日未明、姫路を出発した秀吉軍は、昼ごろ明石に到着。叛旗をひるがえした洲本城（菅平右衛門尉）攻略のための軍勢を派遣する（兵庫県史３．７２２－３頁）。臨戦態勢という雰囲気のなかで、十輪寺としても、各種の接待に対応したものであろう。そのことが、「秀吉ゆかりの杉」という話に集約されて今日につながったものと思う。

日本歴史学会会員　　茨木　一成

十輪寺